



宮城学院の植物たち その3 —トチノキ—

宮城学院女子大学 一般教育部教授 木村 春美

「宮城学院の植物たち」のシリーズ第3回は、宮城学院のプロムナードを飾るトチノキ並木（写真1）を取り上げます。日々来学する度に何気なく見上げている、あるいはそこに存在することを意識したことすらないかもしれないトチノキを巡る、取りとめのないお話です。

1. 並木、そして葉・樹皮・材木

世界的に有名な並木道と言えば、パリのシャンゼリゼ通りのマロニエ（西洋トチノキ）並木を思い浮かべる方が多いかもしれません。日本の大学の並木はというと北海道大学のポプラ並木でしょうか。そして、宮城学院はトチノキです。トチノキは北海道、本州、四国、そして九州でも見られる落葉広葉樹で、特に雪の多い東北や北陸などで馴染み深い大木です。山地の沢沿いで多く見かけられ、サワグルミ・カツラなどと共に渓谷林を形成し、大きいものは高さ35メートル直径4メートルにもなると言われています。街路樹としては、県木となっている栃木県の県庁から宇都宮市役所までの「シンボルロード」（通称）の並木があります。仙台市内では泉パークタウン寺岡など数カ所に並木があり、台原緑地近くの「とちのき公園」には1882年ごろに植林された多数のトチノキが年月を経て巨木となっています。石川県白山市にある「太田の大トチノキ」は、幹周りが13メートルにもなり天然記念物に指定されています。白山市の公式サイトによれば、樹齢約1,300年で国内最大とされていて、まさに森の巨人という表現がぴったりです。

実は、仙台に移り住んだばかりの頃は、ホオノキと区別が付きませんでした。どちらも大木で大きな葉、しかも同じくらいの枚数の葉が枝先に集まって付いているからです。しかし、葉のつき方と葉の特徴をよく観察するとその違いがわかると教えてもらいました。トチノキの葉（写真2手前&3）は、大きな掌状（手のひら型の形状）複葉で対生（2枚ずつ向い合って生える）、小葉5枚から7枚（時には9枚）で1枚の葉を形成します。小葉は15センチから40センチの長い楕円形で（中央の小葉が最も大きい）、縁はギザギザ



写真1 2021年5月10日撮影



写真2 2021年11月11日撮影



写真3 2021年7月11日撮影

しています。葉は厚みがなく、秋に黄色く色付いたあとの落葉時には、乾燥して縮こまったり端が丸まったりしてしまいます（写真2奥）。一方、ホオノキの葉は、1枚1枚が独立した葉でやや厚くて硬く、葉の付け根が微妙にずれている互生（互い違いに生える）で、落葉してもその形を保ち存在感があります。この大きな葉は、料理を盛ったり包んだりするのに役立ち、風味も良いので、飛騨地方などの郷土料理には欠かせません。朴葉味噌、朴葉包み焼き、朴葉寿司などに重宝されてきました。朴葉味噌は、食材を味噌と共に葉に乗せて焼き、包み焼きは文字通り包んで焼きますが、どちらも燃えにくい葉の特性を活かした料理です。全国的には柿の葉寿司の方が知名度は高いでしょうが、大きな朴の葉で包んだ朴葉寿司も香り高い逸品です。ちなみに、ホオノキも宮城学院の敷地内に自生していて、こども園の園児たちが落ち葉でお面を作ったりして遊んでいるのを見かけます。

話を戻し、トチノキの樹皮は灰褐色で、小さな凹凸が多いため触るとザラザラしています。成長すると樹皮が剥がれ落ち、特徴的な波目模様が現れます。材木は、木目が美しく「絹のような」と形容されるほど光沢もあり、また軽軟で加工もしやすいため箱類、彫刻、漆器の木地、家具などに広く利用されています。材木の色は、黄白色～淡黄褐色と明るめです。大木になると凹凸やコブがありユニークな木目が出ることから、銘木として珍重されます。昔は、太い幹をくり抜いて臼を作っていたようですし、炭火に炙られても反り返ったり変形しにくいいため、炬燵板に最適でした。現在でも一枚板としてテーブルに利用され、個性的な作品に仕上げられています。滋賀県でマンションのキッチンカウンターにトチノキの材木を使用するため伐採が進み、この状況に危機感を抱いた人たちが巨木を守る会を立ち上げて調査を行い、保全に向けた動きも起こりました。また、バイオリンの裏甲板にも使われてもいるようですが、これは「普及品に」という但し書き付きでした。

2. 冬芽・花・実

トチノキの冬芽は1～4センチですが、その芽鱗(芽を覆って保護するうろこ状の小片)が樹脂でベトベトしているので簡単に見分けられます。葉の落ちた後の葉痕は、ユニークな表情の顔に見えたりします。トチノキを含め、幼木の愛らしい葉痕を探しながら歩くのが冬の森歩きの楽しみにもなります。春から初夏にかけて15～25センチの円錐状の花序(花の集団)を上に向かって咲かせます。一つの花序に両性花(雄しべと雌しべの両方をもつ)と雄花(雄しべのみをもつ)が混じって咲いています。一花序当たりに、両性花は5個程度、その他の小花は全て雄花だそうです。ほのかな甘い香りを発散させて、ハチなどの訪花昆虫を誘い受粉を手伝ってもらいます。木々の背丈が高くて間近で実物の花を見たことはありませんが、この花などを蜜源とした宮学ハニーは、私たちの胃袋と心を満たしてくれています。

秋には3～5センチもある実(写真3&4右)が実ります。重さは20～30gもある重い実です。実は熟すと3つに裂け、中から顔を出す1～2個の種子は赤褐色で光沢があります。このトチの実は、縄文時代から食用にされてきました。飢饉の際の重要な救荒食物でもあったようです。とはいえ、苦味が強く、アク抜きをしないと食用にはなりません。以前、同窓会にお勤めされていた佐藤澄子さんが、「今年



写真4
栃餅 モチモチの木絵本 日本語版と英語版 栃の実

はたくさん実りましたから、栃餅にされてはいかがですか」と軽くおっしゃるので、実を拾い集めて調理方法を調べてみましたが、水に浸す、干す、表皮を剥く、繰り返しお湯をかけたあと冷ます、煮立てて灰を入れて冷ます、灰を追加してドロドロにして数日置く、薄皮を剥く、、、と、とてもとても私の手には負えないとあっさり諦めました。佐藤さん、白状します。ごめんなさい。(アク抜きの手順は他にも様々にあるようです。)でも、そうして作られた栃餅は深い深い味わいです。写真4左下の栃餅は山形県で買い求めました。三重県出身の私は、栃餅よりも栃の実煎餅の方が馴染みがあります。一昔前には、飛騨高山を訪れたときのお土産は、決まって歯が折れるかと思うほど固い栃の実煎餅でした。最近では、柔らかくてザラメをたっぷり練り込んだ薄焼きも出回っていますが、やはり固くて分厚くて甘すぎない昔ながらの食感と味わいあってこそその栃の実煎餅だ、と感じるのは私だけでしょうか。ただ、歳を重ね歯が弱ってくると堅焼きのものは食べられなくなってしまうだろうな、とも思います。さて、餅に仕上げられなかった実ですが、落下しても割れずに殻に覆われたままだったのも

のを振ってみると微かに音がします。泉鏡花の短編に『栃の実』という作品があります。茶屋の娘から「お土産に」と受け取った栃の実を大事にとっておく主人公ですが、「茶箆笥の抽斗（ひきだし）深く、時々思い出して手に据えると、殻の裡（なか）で、優しい音がする。」として物語は終わります。そうです、言葉にするのが難しく、カタカタでもないコトコトでもない優しい音がするのです。「優しい」は、音についての描写であると同時に、その娘の印象についてでもあるのでしょうけれど。

3. 『モチモチの木』

小学生のとき、『モチモチの木』（斎藤隆介作 滝平二郎絵 岩崎書店）（写真4中央）が課題図書になりました。私自身は高学年で課題は別の作品でしたが、担任の伊藤敬昌先生のお薦めで低学年の課題図書だった『モチモチの木』を手に入れました。臆病な豆太が、夜中に腹痛を起こして苦しむじさまのために勇気を奮い立たせて、モチモチの木が襲ってきそうな恐怖と戦いながら暗闇の中を走り、医者さまを呼びに走るお話です。版画も個性的で物語をより印象的にしています。30年近くも前から小学校3年生の国語の教科書に採用され、指導書が書籍となって出版されているほか、ネットには様々な指導案が上げられています。このモチモチの木がトチノキであることを意識したのは実は最近のことです。確かに本を読み返してみると、大木で、実を落とし、餅にする、これは確かにトチノキに他ならないのですが。英語版では、タイトルは“The Tree of Courage”、豆太が名付けたモチモチの木は“Mochi tree”、木は西洋トチノキを指す“a horse chestnut tree”となっています。英語では勇気とはっきり言語化され、日本語の擬態語・擬音語は英語に訳し難く、英語圏では馴染みもあり種類も近い西洋トチノキとなったのですね。

この物語が私の心から離れない最大の理由は、豆太の勇気ある行動というより、臆病な豆太の描写にあります。夜中にひとりで外（おもて）にあるセッチン（便所）に行くことができません。昼間は怖くもなんともないモチモチの木が、夜になると恐ろしくてたまらないからです。毎夜、じさまを起こして外に連れて行ってもらい、しゃがんだじさまに抱きかかえてもらってしょんべんさせてもらうのです。実は私も小さい頃、母の実家のある鈴鹿山脈釈迦ヶ岳の麓にある集落で祖父母たちと夏を過ごしていました。昼間は元気に遊んでいますが、街灯のない村のほぼ真っ暗闇の夜はそれだけでも恐ろしくて、おまけに樹木は昼間より大きく見え、何かを阻むかのようにどっしりと構えているように感じます。夜中に目を覚ますと「おばあちゃん、おしっこ。」と祖母を起こし、一緒に玄関から外に出て軒先で用を足すのです。朝になると、地面は夏の太陽に照らされてはいますが、夜中のおしっこの「あと」がくっきりと残っています。子ども心にその痕跡が早く消えてくれるように、誰も玄関を通らないように、外から誰も訪れてこないようにと祈ったものです。とはいえ山あいでの暮らしは私には非日常で、従兄弟や又従兄弟たちと遊ぶのは刺激的で楽しく、恥ずかしい思いなんて大抵はすぐに忘れて遊びに夢中になるのですが、いつ

の間にかまた怖い夜がやってきてしまいます。いつまでこうやって祖母を煩わせていたのか思い出せるわけありませんが、自分が我が子に『モチモチの木』の絵本を買って読み聞かせた時、何故かこの記憶が鮮明に蘇りました。今でも昨日の出来事のように。世代が進み孫に読んだ時、「実は、春美**ばあば**も豆太とおんなじで、ひとりでおしっこに行けなかったんだよ。」と言ってみたのですが、どうして外に行かなければならないのかすら理解できない彼らは、キョトンとして全く反応はありませんでした。笑われる覚悟だった私は拍子抜けしてしまったのでした。

4. 樹木も人も

新芽の季節に大学のトチノキ並木を見上げる時、決まって心に浮かぶことがあります。ひょっとするとお気づきの方もあるかもしれませんが、正門から入って右側の手前から3本目のトチノキは、他の木々よりずっと遅くに新芽が出てきます。決してその木だけが若いわけでもなさそうですし、弱っているようにも見えません。人間に個性があるように、同種の樹々にも個性（人間のそれと区別して個体差と呼ぶようです）があり、このトチノキはのんびり屋さんなのでしょう。不思議なことに、春はかなり遅れを取りますが、実をつけるのも黄葉するのも落葉するのも時期を外すことはありません。ちなみに、落葉のタイミングも千差万別で、必ずしも日当たりや風当たりだけがその違いを産んでいるわけではなさそうです（写真5）。（さらに付け加えれば、例えば街灯の傍の木は紅葉も落葉も遅いように思います。）樹々に個性があることは、『樹木たちの知られざる生活：森林管理官が聴いた森の声』（ペーター・ヴォールレーベン著 長谷川圭訳 早川書房）にも書かれています。興味深い事実ですが、学生もトチノキのようにそれぞれ個性的で、中にはおっとりさんがいることを忘れないでいたいと思います。

謝辞) この原稿を書くにあたり、あきた森づくり活動サポートセンター総括所長の菅原徳蔵氏から貴重な情報をいただきました。また、宮城学院女子大学 生活環境科学研究所 ミツバチ科学研究部門の藤原愛弓助教にご指導いただきました。紙面を借りてお礼申し上げます。文中の誤りは全て著者の責によるものです。



写真5 2022年1月25日撮影